



の中の



## 第23回 サウルの息子

—愛か、狂信か?—

川崎 二三彦

### 顔の映画

カンヌ国際映画祭グランプリをはじめ、数々の賞を獲得したというから、とにかくすごくいい映画なんだろうと期待して出かけてみた。

と、どうであろう、映画は冒頭、主人公の顔を大写ししたのはよいとして、場面が変わり、ストーリーが展開しても、画面の大半はいつまでも主人公の顔に占められていて、背後の情景がどうなっているのか、今どんな状況であるのかがよくわからない。おかげで、客席の私は次第にストレスが強くなっていく。

アウシュビッツ。



主人公サウルは、囚人としてガス室に送られる順番を待つ身だが、今はゾンダーコマンドとして働いている。耳慣れぬ言葉だが、ゾンダーコマンドとは、同胞であるユダヤ人の死体処理に従事する役を負わされた特殊班のことらしい。いずれ誰もが殺されるとしても、彼らの順番はいくぶん遅くなるというのだけれど、死体を運び出し、焼却し、遺灰を運び出して川に捨てるという仕事は過酷というほかない。

大写しの顔の合間に現れるそれらの様子や、断片的に知らされる彼らの生活ぶりを垣間見ている、私にも、ようやくカメラワークの意図が見えてきた。簡単に言えば、観客にわざと状況を俯瞰させないのである。そしてそれ

は、とらわれの身となって明日の命も定まらないユダヤ人の置かれた境遇を否応なく想起させる。

「どうなっているんだ、もっと説明してくれ」

思わず湧き上がった内心の声が、そのまま彼らの叫びに繋がっていくカメラワークの見事さが、受賞の理由だったのだろうか和推測した。

それにしても、全編アップで出続けるサウルの一挙手一投足が観客を惹きつけなければ決して成立し得ない作品だということに、彼を演じたのが、目下長編小説を執筆中の詩人だというから脱帽。

### 息子はいない?

ところで、ガス室送りにされても、稀には死にきれず、生存している者がいるらしい。むろん、そうであっても死体を処理する際には発見されるし、発見されれば、軍医によって直ちに殺害され、解剖に回される。物語は、そうして生き残った一人の少年を、サウルが目撃したところから始まる。

ゾンダーコマンドは、その特殊な役割から、アウシュビッツの中でもある程度の自由が与えられているらしく、サウルは、殺害された少年が運ばれた部屋に赴き、担当の医師に解剖しないでほしいと依頼する。このあたりから、ようやく私は、この少年がサウルの息子だと確信する。とはいえ、解剖医のところへ行くだけでも無謀な行為だから、医師は驚き、当然のことながら、彼の希望を拒絶する。

「私も囚人なんだ」

ナチによるアウシュビッツの管理は、効率を極めている。囚人が囚人を監視し、囚人が囚人をガス室に誘導、後始末も囚人が担う。だから、囚人の解剖も囚人医師が行い、ナチは結果について報告書を要求すればよい。映画では（そして現実でも）、「部品」と

という言葉が囚人を指しているらしく、それがごく普通に飛び交うさまに、却って戦慄を覚えてしまう。



それはさておき、依頼を拒否されたサウルは、ならばと、後刻あらためてその場に足を踏み入れ、遺体を持ち出してしまおうのである。

彼は一体何をしたいのか。実は、ユダヤ教の教義に従って、息子をきちんと埋葬するつもりなのだ。

「そのために、これほどの危険を？」  
無信仰の私には理解できないが、仲間のゾンダーコマンドまでも危険にさらしながら、追悼の祈りを捧げるべくラビ(ユダヤ教の聖職者)を探し求めて求めて走り回るサウル。

そんな展開が続く中、見ている私が混乱する台詞が語られる。

「お前には息子はいないじゃないか」  
「一体どういうことだ？ 息子じゃないのか？」

「妻の子じゃない」

サウルは控えめにこう呟くけれど、わが子を愛するが故の行動だと考えていた私には、もう何がなんだかわからなくなってしまった。

### 絶望の檻で

ところで、恥ずかしながら本作を観るまで何も知らなかったのだけれど、アウシュビッツ(ビルケナウ強制収容所)の歴史上、たった一度ではあるが、武装蜂起があったという。1944年10月7日、ゾンダーコマンドの集団が3人のナチの兵士を殺害して遺体焼却炉を爆破し、数百人の囚人が脱出したというのである。映画はそれを描いており、サウルもその一員だった。

とはいえ、蜂起に勝算があるはずも

なく、いずれは死す運命にあることは、誰もが自覚していただろう。Xデーが迫る中、サウルもさまざまな任務を果たすよう促されるが、彼はあくまでも少年の埋葬にこだわり、任務よりも優先させる(ように感じられた)。

狂信？

という言葉が私の脳裏をかすめ、わりきれなさが解消されないままので、映画館を出てからも、しばらく彼の行動の意味を考え込んでしまった。

そして思う。アウシュビッツに移送されたユダヤ人は、まさか彼らが「部品」と呼ばれ、町工場のありふれた作業のようにベルトコンベア式に次々とガス室に送られ、殺害されて燃やされ、灰となって川に捨てられるなんて思いもよらなくとも、それに従事させられるゾンダーコマンドは、そこが絶望の檻であることを最も痛切に理解している人たちであろう。

では、大量殺人に従事させられ、明日は自身も死ぬ身の彼らが、今日を生きる意味は何なのか。死した者を生かし、自らが生きた証を確認する唯一の行動が、息子(と信じる少年)を手厚く埋葬することだったのではないだろうか。

生の究極の意味が、究極の殺害現場で浮き彫りにされた映画、それが本作品なのかも知れない。

\* 2015/ハンガリー

\* 鑑賞データ 2016/02/22 京都シネマ

\* 公式 HP <http://www.finefilms.co.jp/saul/>

\* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/40106>

第1回	<a href="#">プレシヤス</a>	* 題名を click すると本文へ ジャンプします。
第2回	<a href="#">クロッシング</a>	
第3回	<a href="#">冬の小鳥</a>	
第4回	<a href="#">その街のこども</a>	
第5回	<a href="#">八日目の蟬</a>	
第6回	<a href="#">いのちの子ども</a>	
第7回	<a href="#">ラビット・ホール</a>	
第8回	<a href="#">サラの鍵</a>	
第9回	<a href="#">少年と自転車</a>	
第10回	<a href="#">オレンジと太陽</a>	
第11回	<a href="#">孤独なツバメたち</a>	
第12回	<a href="#">明日の空の向こうに</a>	
第13回	<a href="#">旅立ちの島唄</a>	
第14回	<a href="#">くちづけ</a>	
第15回	<a href="#">もうひとりの息子</a>	
第16回	<a href="#">メイジーの瞳</a>	
第17回	<a href="#">ファイ</a>	
第18回	<a href="#">思い出のマーニー</a>	
第19回	<a href="#">ショートターム</a>	
第20回	<a href="#">真夜中のゆりかご</a>	
第21回	<a href="#">きみはいい子</a>	
第22回	<a href="#">ユール!</a>	